

比喩の使用と濫用 —進化論における志向的語り口の問題点—

浜本 満

キーワード：進化、アルゴリズム、目的論、志向性、利己的な遺伝子、社会生物学、比喩、
嬰兒殺害

I はじめに

人間や社会についての研究のすべてが、人間の本性に関するなんらかの想定の上に行われている。人間存在を規定する一定のデフォルトのパラメータや基本スペックを暗黙の前提にして議論を進めているのである。こうした前提を揺るがす研究をしてきたとしばしば自負している文化人類学さえも例外ではない¹⁾。それぞれの学問分野が人間についてもっているこうした前提は、他の学問が人間の基本スペックについて新たな知見を提供する都度、それに応じてアップデートせねばならないはずである。残念ながら、実態はそんな風には行っていない。リチャード・ドーキンズは 1976 年に「哲学や、人文学という名で知られている分野では、いまだにダーウィンなど存在したことがないかのような教育が行われている」[Dawkins 1989:1] と嘆いている。

最近になってもスティーブン・ピンカーは、こと人間の思考や行動を説明しようとする段になると、そこに何らかの生得的本性を持ち出すことに、いまだに大きな抵抗が存在している [Pinker 2002:viii] 現実を指摘している。彼によると、人間諸科学があらゆる思考や感情や行動を単純な学習メカニズムで説明しようとし、あらゆる慣習や制度を、子供が周囲の文化によって社会化された結果の産物として説明しようとし、人間にとって自然に思える数多くの概念を「社会的に構築されたもの」として説明しようとするのであれば、それらは未だに、人間の心を空白の石版 (blank slate) ととらえる前世紀の人間モデルの延長線上にある [Pinker 2002:6]。19 世紀末からろくにアップデートされていないというのである。

しかし理由なくそうであったわけではあるまい。1970 年代に文化人類学を学び、構造主義や記号論、現象学や解釈学の影響をもちに受けつつ研究の基礎を作ってきた私自身について言えば、人間の行動を説明するうえでとりわけ重要なのは、人々が世界をどのようなものとして思い描いているか (世界に対して抱いている信念)、人々が状況をどのように理解しているかであった。人は自らが抱いている信念や理解をもとに、それらに導かれて世界に対して行動するのであり、人々の行動を説明するとは、その背後にある信念や状況理解を明らかにすることに他ならない。さらに人々の信念や理解は「客観的な世界」によって一意的に決定されてはいない。人間は世界を、それぞれの「文化」ごとに異なっているかもしれない仕

方で「意味づけて」おり、人々が世界に対して抱いている信念や理解はそうした意味づけの作業の産物だからである。もちろん人間が世界に対して、第一に身体を介して関わっているのだという事実や、世界への実践的なかわりの中で感情がいかに大きな役割を演じているかを忘れたわけではない。しかし言語を通じて世界を意味づけ、それを通じて自らとその行動を世界に対して定位することこそが、他の生物とは異なる人間固有の特質であり、それを明らかにすることが重要なのだと考えていたのである。

しかしこのことが、私に進化の問題に対して距離をとらせていた。人間の身体的構造や機能が進化の産物であることは当然のことであると考える一方で、人間の心、思考や感情—その能力が進化した脳の産物であることを疑うものではなかったが—の内容を進化という角度から問題にしてみようとは考えてもみなかった。生まれた後で社会的文化的な相互作用の中でそれらが獲得されることは、私にはあまりにも当たり前に思えた。世界をどのように意味づけるかには原理的に無数の多様性があり、人間の精神は社会的文化的学習を通じて、それぞれの文化に固有な特定の意味づけの仕方を手に入れるのである。それは身体的—大脳も含めて—進化が言わばハードウェアとしてのヒトを作り上げた「後で」、おそらくはその結果として獲得された新しい領土であり、意味づけし、分析し、関係付ける人間の「精神」の働きが全ての作業を行い、それゆえ生物学的進化とは別の原理が作用する世界、言わば、ソフトウェア開発の世界なのだ、そんな風に漠然と考えていたのである。

このように身体とは独立に知的作業を遂行する「精神」といったものの独擅場を想定していた点で、おそらく私の念頭にあった人間モデルもまた啓蒙主義的人間観が想定していたものと大差なかったのかもしれない。

私は2004年にある事情で、思いもよらずダーウィン進化論の20世紀以降の発展を追わねばならないことになり、それがきっかけで1990年代以降急速に展開してきた進化心理学や脳科学にも触れることになった。それはちょっとしたカルチャーショックだった。少なくとも、それらは私が人類学を行ううえで暗黙のうちに依拠していた人間精神の働きに関するモデルが、おそらく時代遅れであることを思い知らせた。上のかなり乱暴な比喩で言うならば、人間がどのようなハードウェアスペックをもっているかについての知識を大幅にアップデートする必要があっただけでなく、ハードウェアとソフトウェアの境界そのものについても—そもそもそうしたはっきりした境界を引くことができるかどうかという点も含めて—大きく考えを改める必要があるようだった。上で想定していたような純粋な人間精神なるものの大活躍できる場面は、意外と限られているのかもしれないと思わせる証拠もあった。かくして、その後ある程度本腰を入れて、それまでずっと疎遠だったこの分野のことを知ろうと努めてきたのだが、それは要するに文化人類学が想定していた人間本性についての暗黙のモデルを見直し、それをこうした新たな知見によってアップデートしようという試みでもあった。

この論考の目的は、しかしながら、この迂回が私に与えてくれた「発見」とそれによるモデルのアップデート結果について報告することではない。「発見」などといっても、もちろん

それらは各々の専門分野に属する人々からすれば、単にすでに常識となった知識である。アップデートの方はというと、いまだ手探りの状態である。

それまでの私のアプローチと進化的なアプローチとをすり合わせることは、けっして容易な作業ではなかった。進化生物学の立場から人間の社会や文化について論じられる際に、世界の意味づけの問題が常に脇に退けられるのを見るたびに、私は一種の苛立ちを禁じえなかったし、遺伝的にプログラムされた動物の行動を論じる際の語り口が、人間の「文化的」行動の領域に対してシームレスに用いられていることにも常に違和感を覚えた。人類学をはじめとする人間諸科学が、人間精神が自由にその作業を行いうるような特権的な領土を想定し、それを任意の造形が可能である空白の石版の如きものと想定し、生物学的進化のロジックとは無縁な世界として切り離してしまいがちであったことは事実である。それが進化心理学や行動進化学の知見から見て時代錯誤的で誤りであるというのも、そのとおりかもしれない。しかし一方で、人間諸科学がそうすることによって人間における何らかの特筆すべき要素について語ろうとしていたということも確かなのであり、そうした仕方によって焦点を合わせようとしていた、人間に特異な要素が正確には何であったのかは、あらためて明らかにする必要がある。進化的なアプローチの議論は、そこから目をそらそうとしているかのように見えた。つまりアップデートとは言っても、それは単に古い知識のパッケージを新しい知識パッケージに置き換えれば済むというものではなかった。新しいパッケージは、しばしば世界の意味づけと、それを介した実践の組織化として社会や文化を捉えるという人類学の基本的なスタンスの一つの否定につながる語り口と組み合わせられて提供されていて、それが受容の大きな妨げとなる。もちろん進化生物学、社会生物学、進化心理学、行動進化学の側から見ると、事態はまったく逆で、人間精神の自由な働きをヒトのハードウェアスペックとその進化とは無縁な、なにか特別なものであるかのように振り回す人間諸科学の頑固さこそが問題だということになるのかもしれない。

社会生物学や進化心理学の語り口と文化人類学の語り口とのあいだにみられる、両者の対話の妨げとなっている齟齬の原因の一つはおそらく、人間だけがそれを備えているように見える「志向性 (intentionality)」についての取り扱い方の違いである²⁾。前者はそれを過小評価し、後者はそれを過大評価しているのだと言えるかもしれない。そしておそらく双方が、人間の志向性を、自然淘汰の盲目のアルゴリズムの中から生まれてきたもの、つまり進化の産物として眺めそこねている。前者が、非志向的なシステムについて気前良く志向的な言葉の比喩を乱用することで、この問題を主題化し損ねているのに対し、後者は進化的視点を志向性の否定であるかのように考えて拒絶している。

志向性の進化はおそらくヒトという生き物を理解するうえで第一に明らかにすべき進化上の大きな出来事であり、進化心理学や行動進化学がまさに解明すべき問題である。そしてそれは文化人類学をはじめとする人間諸科学が、これまでのように当然の前提としては「ならない」もの、それを可能にした生物学的進化の背景の下で見直すべきものなのである。私

はその最大の障害になっているものが、志向的な言語を無反省に使用すること—比喩的にあるいは字義通りに一であることを示したい。それは生物進化論においては、一見理解しにくい遺伝子の言葉での、自然淘汰の盲目的アルゴリズムによる進化の説明を、啓蒙的にわかりやすい比喩で語るものだったのかもしれない。しかし比喩の浸透は、むしろ啓蒙の意図に反して、正しい理解の妨げになる。そしてこの比喩が、それ自体志向的システムである人間に対して、そのまま用いられるとき、それは単なる誤謬を帰結する。私は志向的な言葉による比喩と手を切るべきだと主張するだろう。そのときに、問題は正しい出発点に立たせることが可能になる。

この論考はあらためて文化と進化の界面の位置とその相互関係について測量し直す試みへ向けての第一歩となる。

II 『利己的な遺伝子』

1 二つの語り口

リチャード・ドーキンズの『利己的な遺伝子』はこの問題を考える上で、重要な位置を占めている。1960年代以降のネオ・ダーウィニズムの諸理論、ハミルトンの血縁淘汰説、メイナード＝スミスの ESS (進化的に安定した戦略) 理論、トリヴァーズの PI (親による投資) 理論などを、数式を用いずに分かりやすく紹介したという意味では一種の啓蒙書である。しかし生物個体を遺伝子によってプログラムされた「生存機械」として、あるいは遺伝子の「乗り物」として眺めるという卓抜な比喩のもとに、進化についての新たな見方を鮮やかにかつ統一的に提示したことで、それは単なる啓蒙書を超えた画期的な著作となっている。進化とは、こうした「生存機械」あるいは自らの「乗り物」を首尾よくプログラムできた遺伝子が、自らの「生存機械」の成功を通じて自らのコピーを増やしていく過程であるとされる。本書は、利他的行動や自己犠牲、協力行動などが、こうしたプロセスによって進化しうることを要領よく解説しているが、このこと自体、そうした行動には文化的規範その他の特別製の文化装備が必要であるにちがいないと漠然と想定してきたナイーブな人間主義者を驚かせるに十分であった。

またドーキンズは文化的現象の領域まで同じく遺伝子中心主義的に説明できるとは考えていない点で、いわゆる社会生物学とは一線を画している。文化的現象については、遺伝子とは別の新たな複製子 (replicator) であるミーム (meme) 概念を提案することによって、その進化を同様なアルゴリズムで説明できる可能性を示唆している。この考え方も、いろいろ問題含みではあるが、実に刺激的である。

要するに『利己的な遺伝子』は多くの人にとって、おそらく、それを読むことが世界の見え方をがらりと変えてしまうような経験をもたらす、稀有な著作のひとつなのである。私は 2004 年にはじめて本書を読んだときに、この有名な本を 30 年近く敬遠し続けていたことを

激しく後悔した。言い訳がましいが、『利己的な遺伝子 (The Selfish Gene)』という書名から、1970年代末以降意味論的な方向性を強めた文化人類学によって激しく批判されていた社会生物学のある種の遺伝子還元主義的な議論を予想させたため、読むに値しないという判断を下してしまっていた。大きな間違いであった。

しかし同時にこの著作には、実に奇妙なところがある。その主旨と効果においておそらく正反対でありうる二つの異質な語り口が平行しているという点である。一つは進化のプロセスを目的や意図や計画をもたない、いわば盲目のアルゴリズムとして語る、ダーウィニズムの実像により忠実な語り口である。言うまでもなく、この著作が私にとって目から鱗が落ちるほどのものであったのは、この語り口で述べられた非目的論的な進化のメカニズムであった。しかし『利己的な遺伝子』を通じてより目立っているのは、もう一つの語り口、生物の行動について、それどころか遺伝子にすら、あたかも目的や意図、戦略をもった存在であるかのように語る「志向的 (intentional)」な語り口である。

もちろん後者は一種の比喩に過ぎない。ドーキンズによるとそれは前者の語り口に戻せるという条件のもとでのみ許される。「ときに遺伝子の言葉は煩雑であるので、簡潔さと精彩を求めて比喩に訴えることになるだろう。しかし比喩に対しては、必要となれば確実に遺伝子の言葉に翻訳し戻せるように、つねに疑いの目を向け続けるだろう。」[Dawkins 1989:45]³⁾ 実際には本書の記述のほとんどが、後者の志向的な語り口で展開されているのは驚きである。疑いの目の存在そのものが疑わしくなるくらいに後者の語り口が前面に出ているのである。

『利己的な遺伝子』というタイトルそのものが後者に属している。遺伝子はあたかも目的をもって振舞っているかのように語られる。この語り口のなかでは個々の遺伝子は、遺伝子プールのなかで自らの数を増やそうとすること、そのみを目的として、他のことには一切考慮を払わない。それゆえに「利己的」なのだというのである。(Dawkins op.cit.:88) 単なる染色体切片に意識があるとは誰も考えないので、このあまりにも明らかな比喩は、安心して振り回せるということなのだろう。おまけに遺伝子の「利己性」は、常に簡単に前者の非目的論的な進化の語り口に言い換えなおすことができる。他の場合についても、おそらく同様だと考えられているのであろう。

しかしここにはドーキンズやおそらく他の生物学者たちが考えるだろう以上に深刻な問題が潜んでいる。まずその点を明らかにすることにしたい⁴⁾。

2 アルゴリズムとしての進化プロセス

自然淘汰が働くのは、種、群やグループはおろか個体に対してですらなく、遺伝子に対してである。「進化とは、遺伝子プール内で、ある遺伝子はその数を増していく一方で、別の遺伝子はその数を減らしていくというプロセス」のことであり、特定の形質の進化は、「その形質が遺伝子プール内で遺伝子の頻度にどんな影響を与えるか」によって説明できる

(Dawkins 1989:45 一部改訳)。この遺伝子中心的な観点を確立することによって、進化理論は、進化の過程になんらかの目的—「種の保存」とか、環境へのよりよい適応とか—があるかのような捉え方と、決定的に縁を切ることができた。ドーキンズの『利己的な遺伝子』はまさに、この観点の広範な受容に最大の貢献をした本であったといえる。

そのロジックは実に単純明快である。遺伝子は—もちろん共存する他の遺伝子や環境との協働のなかで—自らの「乗り物」あるいは「生存機械」である生物個体がどのようにできていて、どのように作動するかをプログラムしている。「生存機械」は生殖活動により、それに乗っている遺伝子を、従ってプログラムをそのまま子孫に伝える。これは一方向的な関係で、「生存機械」の上にその作動中に生じた変更は遺伝子の方には伝わらない。遺伝子レベルで生じた変異は、生物個体の成り立ちや作動仕方に変異をもたらしうる。それが、他の個体を含む環境との相互作用を通じて⁵⁾、その生存機械が無事生き延びて生殖し子孫を残せる確率を上げ⁶⁾、結果的に当の変異した遺伝子の複製を増やし、遺伝子プールにおけるその頻度の増大を可能にした場合、その変異は広まっていく。つまり進化が生じるのである。

短縮した言い方をすると、「結果的に自らの複製をより多く作るように生存機械を設定できたプログラムは、自らの複製をより多く作ることになる」ということになるが、そこには一種のトートロジーが含まれている。それは「すぐれた遺伝子」が生き残っていくのだと言いながら、同時に、「すぐれている」とはどういうことかと問われて「生き残れる」ということだと答えるようなものである [Dawkins 1989:86] ⁷⁾。しかしこのトートロジーこそが、遺伝子による発生の制御というおそろしく複雑なプロセスを介してたち現れてくる進化というプロセスの、中心の真実なのである。

私はドーキンズの駆使するさまざまな比喩のうちでも、遺伝子によってプログラムされた生存機械という比喩を好んで用いている。しかしプログラムという比喩は、一種の意図性を含意してしまう点で、要注意である。実際には生存機械に生じるプログラムの変更はランダムで、いずれの変更も、それが結果的に引き起こす事態を予見したのも、目指したものでもない。ランダムに生成され変更されるプログラムのうち、たまたま結果的にその生存機械の包括適応度を上げる効果をもったものがあれば、遺伝子プールの中で拮抗するというだけの話なのだ。進化とは、いかなる前もって定められた目的も設計もなく、ランダムな変異の発生→自然淘汰による結果判定というアルゴリズムをただ盲目的に繰り返す「自動的プロセス」(Dawkins 2006:9) である。この単純なアルゴリズムで、生の複雑な多様性のほとんどが説明できることこそ、ダーウィン進化的説明のエレガンスであり強みなのである。別の著書において、ドーキンズは同じ見解をより直接的な言葉で表明している。「自然淘汰は盲目の時計職人である。盲目であるというのは、それが見通しを持たず、結果についてのもくろみをもたず、めざす目的がないからだ」[Dawkins op.cit:29]。そこで彼が説明しようとするのは、こうした盲目のプロセスがいかにか「まるで腕のいい時計職人によってデザインされたかのような、設計と計画に基づいているかのような錯覚を引き起こす」[ibid] 結果をもたらすか

ある⁸⁾。

生物がときに示す複雑に絡み合った習性は、上述のトートロジー的なアルゴリズムの結果として説明可能である。ドーキンズ自身が用いている例で考えてみよう。カッコウは卵を他の鳥、ヨシキリなどの巣に産卵する託卵という習性で知られている。本当かどうか知らないが、その巣の中で孵ったカッコウの雛は、ひととき大きな声を張り上げるのだそうだ。それは危険な捕食者をひきつけてしまいかねないほどの大声なので、カッコウの雛は下手をすると自分自身の命を危険にさらしてしまうことになる。カッコウという生存機械は、なぜ雛のときにそのような動作を行うようプログラムされているのだろうか。ドーキンズの説明はこうだ。

「カッコウの雛が大声で騒ぐと、里親が彼に餌を与える確率が増した。このため大声で鳴くようにしむける遺伝子は、カッコウの遺伝子プール中で数を増してきたのである。雛の鳴き声に対して里親が餌を与えるという形で反応したのは、このような反応を示すようにしむける遺伝子が、すでに里親の遺伝子プール内に拡がっていたからだ。その遺伝子が里親に拡がったのは、鳴きわめくカッコウの雛に余分の食物を与えなかった個々の里親たちが、カッコウの雛に余分の食物を与えたライバルたちより、少数の子供しか育てられなかったからである。カッコウの声が捕食者を巣におびきよせたのが、その理由だ。大声を上げさせない遺伝子は、大声を上げさせる遺伝子に比べて捕食者の腹の中に収まってしまう可能性は小さかったろう。しかし、前者は余分の食物を与えられないという形でもっと大きな失点をこうむったのだ。大声を上げさせる遺伝子は、上記のような理由でカッコウの遺伝子プールに拡がったのである。」 [Dawkins 1989:132]

遺伝子レベルで生じるランダムな変異＝生存機械の作動プログラムの変異 → 自然淘汰＝プログラムの作動結果（包括適応度）による判定 → より多くの複製を作りえたプログラムの拡がり、という基本的なロジックに理解困難なところはないし、この語り口による上記のカッコウの例のような具体的な説明にも、「文系」人間をとまどわせる難しさはない。すっきりと分かりやすい説明である。

3 志向的 (intentional) な比喩による語り

しかしこの理にかなった語り口と平行して、『利己的な遺伝子』のなかでは同じ事柄がまったく異質な語り口によっても提示される。それが第二の志向的語り口である。同じことが、あたかも目的意識や動機をもって、利益追求の計算を駆使しつつ渡り合う行為者たちの相互行為として語りなおされるのである。「文系」人間がとまどってしまうのは、むしろこちらの方だ。上述の説明が、進化が起り、特定の習性や特徴が定着していくプロセスを正しく分かりやすく説明できているときに、なぜ、こういった志向的な語り口でそれを語りなおす必要があるというのだろうか。

カッコウの雛と里親にそれぞれ見られる習性の定着を説明する際にも、上述の説明と並ん

で、カッコウの雛が里親を恐喝するという説明が、一つの比喩として提供されている。遺伝子の言葉だけで十分事態が明瞭であるときに、なぜあらためて、カッコウの雛が「多量の食物を得ることによる利益」を求めて、里親に対して「捕食者をおびきよせようとする」「恐喝」戦術をとっているのだ、などと説明しなおす意味がどこにあるのだろうか。あるいは里親が、特別たくさん食物を与えて「カッコウの雛を黙らせ」ようとしていると言い直す必要がどこにあるのだろうか。

なによりもこれは、明らかに間違った記述である。カッコウの雛が大声を上げるのは、別に捕食者をおびきよせようと考えてではない。多量の食物を得ようと考えてとすら言えないだろう。何も考えていない、という方が正確なのだ。プログラムされたとおりに作動しているだけのことである。それが結果として捕食者の注意を惹くことによって巣の雛たちを危険にさらすことになり、たまたま里親の示す習性のおかげで、その雛に応分以上の食物の供給がなされることになるというだけの話であり、そこに行為者の目的や動機を挿入して見せても全く余計なことなのである。里親についても、大声に反応して餌を与えるというのが、彼女にデフォルトでインストールされているプログラムであって、雛を黙らせようと考えてやっているわけでないことはいままでもない。何も考えずにそう振舞うことが、結果的にうるさい雛をおとなしくさせるというだけの話である。

もちろんドーキンズ自身が、それは百も承知である。それはあくまでも「比喩」にすぎず、あたかも目的意識としたたかな計算能力をもったエージェントどうしの駆け引きのように眺めることが可能だというにすぎない。

なぜそもそもこうした「比喩」で語る必要があったのだろうか。非専門家に分かりやすいように、だろうか。たしかにこうした比喩の語りは直感に訴えるところがある。しかしドーキンズが本当に読者に分かせたかったのは、自己複製する遺伝子の上に働く、目的も先の見通しももたない盲目の自然淘汰のアルゴリズムという進化についての考え方の方なのであるから、目的論的な構造を持った第二の語り口はむしろその妨げになってしまいかねない。

4 比喩的語りの正当化の根拠とその問題

おそらく遺伝子というまでもなく、鳥や昆虫や魚が主人公であれば、こうした比喩が字義通りにとられてしまう可能性は小さい。彼らが生き残って子孫を増やすという目的意識をもってしたたかな利害計算の上に行動しているとは、誰も本気で思わないからである。しかもこの比喩的説明は、ドーキンズが繰り返し強調しているように、必要となればいつでも遺伝子の言葉で正確に翻訳しなおすことが可能である。先に「利己的な遺伝子」という比喩について確認したように、生き物全般についても、おそらくドーキンズはこの二点を前提にして、直感的によりすんなり頭に入ってくる志向的な比喩で説明することを選んだのだろう。

しかし、ドーキンズの『利己的な遺伝子』の第一版に対する哲学者たちの批判の多くは、彼らがこの比喩を字義通りにとってしまったことに起因するものであった。第二版の補注に

においてドーキンズはそれらに苛立ちを表明している [Dawkins 1989:278]。メアリ・ミジリーはその「悪意に満ちた論文」において「遺伝子が利己的でも非利己的でもありえないのは、原子が嫉妬深かったり、ゾウが抽象的だったり、ビスケットが目的論的であったりすることがありえないのと同じだ」と批判しているという。これに対しドーキンズは、比喩を比喩として理解できない愚か者だと彼女を揶揄することによって応じている。「あたかも動物や植物あるいは遺伝子が、成功率を増加させる最善の方法を意識的に考え出そうとしているかのような戦略的な語り口—たとえば、『オスはハイリスク・ハイリターンを好むギャンブラー、メスは着実な投資家』といった表現—は、活動中の生物学者のあいだではありふれたものになっている。このような言い回しは、それを理解する十分な資格を備えていない人間の手にたまたま落ちるといふことさえなければ、無害な簡便語法である。」 [ibid.]。この応答は二重の意味で興味深い。第一にこうした比喩的言い回しが、単に啓蒙目的で用いられている以上に、生物学者たちの普通の言い回しになっていることをそれは証言している。また、予想通りこうした言い回しの採用が、比喩が字義通りに受け取られる可能性が低いという確信と、遺伝子の用語による正確な表現にいつでも還元できるという確信にもとづいていることもわかる。鳥や昆虫相手の生物学者は、それらが比喩であることなどあまりにも当たり前なので、自分たちが比喩と字義通りの記述を混同しないことに自信満々で、いざとなればいつでも進化のアルゴリズムの用語に立ち戻れるという安心から、上機嫌でこれらの比喩を振り回すことができるのである。

しかしこの二つの前提はけっしてそれほど堅固なものとはいえない。そもそもミジリーの批判自体が、高度な知的訓練を受けた者ですら比喩が容易に字義通りの記述と混同されうることを示しているのであり、そうだとすればそれを啓蒙目的で使用するものの危険性は推して知るべし、である。実際には生物学者であるドーキンズ自身にとってもおそらく、この二つの前提はいささか怪しい。

例えば彼は、動物を主語とした「だます」とか「うそをつく」という言葉の使用について、次のように言い訳することによって、それを単なる比喩以上のものとして扱ってしまっている。比喩と字義通りの表現を隔てる境は限りなく薄い。「私は単に（その行為が）欺瞞と機能的に等価な効果をもっているということについて述べている。たとえば、ある小鳥がタカがいないときに『タカがいるぞ』という信号をつかい、それによって仲間をこわがらせて追い払い、食物をひとり占めしたとしたら、この鳥はうそをついたといつてよい。この鳥が故意に意識的にだまそうと意図したというつもりはない。意味しているのは、うそつきの鳥が他の鳥の犠牲によって食物を獲得したということと、他の鳥が逃げたのは、ほんとうにタカがいる場合に適した方法でうそつき鳥の叫び声に反応したためだということだけである。」

[Dawkins 1989:64]

通常はタカがいる場合に発せられる警戒音を、食物を前にしたときにタカがいないにもかかわらず発するようにたまたまプログラムされた小鳥は、そのおかげで結果的に仲間がいな

なくなった状況でたっぷり食物にありつくことができる。もしこの小鳥が、このプログラムのおかげで他の仲間より子孫を残すまで生き延びる確率を高めることになるなら、そのように彼をプログラムした遺伝子は拡がっていくだろう。それだけのことである。その小鳥の行為を「うそをついた」と言い直すことにどれほどの意味があるというのだろうか。志向的なエージェントが行う欺瞞と効果において等価であるから、それを「うそつき」と呼んで差し支えないというのは、あきらかに誤った正当化である。私が研究室に入る際にドアの表示を「在室」に変えるのを忘れて入室した場合、面会の約束でやってきた学生が不在だと勘違いしてがっかりして（よろこんで？）帰ってしまうかもしれない。私の行為は、効果において「欺瞞」と等価なのだが、私のこの行為を「うそ」と呼ぶことにはあきらかに無理がある。志向的な言葉は、単に結果の同一性を基準にしては使えない。それは意図、あるいは目的の存在を条件としている。従って「小鳥が仲間をだました」というのもあくまでも比喩以上のものではありえないのである。ドーキンズのここでの議論は、ドーキンズ自身が自らの比喩に足をとられて、その比喩性を忘却してしまいうることを示している。こんな風に、比喩は容易に字義通りの表現に取り違えられてしまいうるのである。

比喩が、いつでも遺伝子の言葉によって翻訳し戻せるという第二の前提も、それほど確かではない。ドーキンズの語りにおいて、しばしば比喩は暴走する。

トリヴァーズの議論を紹介しつつ、彼は述べる。配偶関係において、オスが子育てに協力する習性をもつ動物においてもオスには「子に対する投資をやや控えめにし、別のメスとさらに余分な子供を作るようにしむける進化的圧力が作用」しているので「ライバルの対立遺伝子の指示よりもやや早めに配偶者を捨てて別のメスを追わせるようにオスを仕向ける遺伝子のほうが、遺伝子プール内で成功する見込みが高いだろう」[Dawkins 1989:147] と。これは遺伝子の言葉による説明である。しかしそれに続いて、ドーキンズはオスに捨てられたメスのとりうる戦略について、志向的な言葉を駆使して語り始める。

「棄てられたメスの選ぶもう一つの手は、あくまでがんばって単独で子供を育てあげようと努力することである。もし子供が十分大きくなっているなら、この選択は特に有利であろう。子供が大きければ大きいほど、すでに子に対して投資された分量は多いわけで、したがってその子を育てるために今後メスが投資せねばならない分量は、ますます少なくてすむことになるからである。たとえ子供がまだとても小さくて、男手を失ったメスが給餌のためにいままでの二倍も精を出して働かねばなくなるような場合でも、初期の投資を無駄にすまいとがんばることは、彼女にとってなお見返りのあることかもしれない。子供にはオスの遺伝子が半分入りこんでいるので、子を棄ててしまえばオスに対する意趣返しになるだろうが、それはメスにとっては何の慰めにもならない。」[Dawkins 1989:148]

大筋を遺伝子の言葉に翻訳しなおすことは可能である。しかし「あくまでがんばる」「努力する」「初期の投資を無駄にすまいとがんばる」「意趣返しをする」などなどが、遺伝子による生存機械に対するどのようなプログラミングに対応する表現なのかと、頭を絞っても無

駄というものだろう。比喩が単に暴走しているのである。ここに続くパラグラフでは、オスに棄てられる前にこちらから先にオスを棄てた方がよいというメスの判断が、独白の形で長々と述べられている。興味のある方はぜひ一読していただきたい。ここまできると、進化のアルゴリズムを比喩によってわかりやすくするという段階を超えて、ドーキンズは単に比喩的な語りを面白がってそれに耽っているとしか思えない。その直後に「この独白は単に説明のために示したものに過ぎない。」[Dawkins 1989:149]とあわてて付け加えているのが笑える。

志向的な比喩で語ることを正当化する(1)志向的な比喩が字義通りにとられることはありえない(2)志向的な比喩はつねにダーウィン進化の因果的な語り口に訳し戻すことができる、という二つの安全弁は、ドーキンズ本人の語りにおいてすら完全にはその機能を果たしていないのである。そのとき比喩はきわめて危ういものになる。

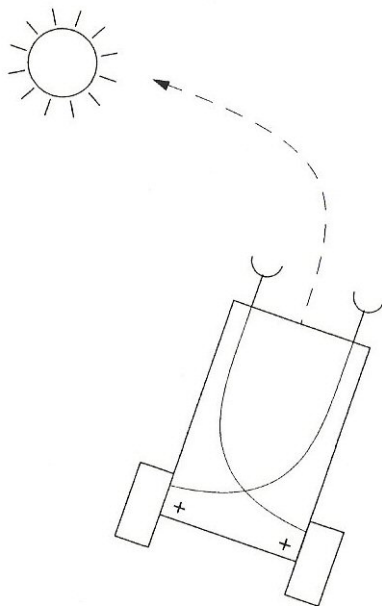
III 志向的比喩の誤謬

進化の説明において志向的比喩が不適切である真の理由は、単に比喩が字義通りにとられてしまう危険と隣り合わせであることや、因果的な語り口へと回収できないほど暴走してしまう危険があることではない。そこにはもっと深刻な誤謬が含まれている。

比喩とは、対象を新たな観点から捉えることを許す記号操作である。時は金なり、時間は川の流る、などの比喩は時間をそれ以外の何かと等置することによって、時間経験がもつ特

殊な側面にそれぞれ照明を当てる。比喩は認識にとっての強力な武器となる [eg. Lakoff & Johnson 1980, リクール 2006, 佐藤 1978, 1981]。しかし逆に言うと、比喩は対象を、それとは別の何かに強引に置き換えるという乱暴な操作であり、誤った推論を導いてしまう危険を持つ。時間が金と同じようなものだからといって、時間を貯めておいたり、貸し借りしたりできるはずだと大真面目に考え始めたりすれば—これも比喩としては十分有効だが—かなり危うい。

志向的比喩の特徴をよりよく理解するために、デネットが用いる「走光性マシン」の例をとろう(左図) [Dennett 1996:102]。箱の前面に二つの光電池が取り付けられており、光



を受けると発電する。それぞれの光電池は交差する導線によって左右の後輪につけられたモータに結線している。たとえば光源が左前方にあると前面左側の光電池の方に多く光が当たり、大きな電流が流れる。それにより右後輪のモータの方が多くの電流をうけて多く回転するので、マシンは左にカーブするように進むことになる。光源の位置が変わると、マシンもそちらの方向に進む。かくして実に単純なメカニズム、単純な因果関係の連鎖によって、結果としてこのマシンは常に光源のある方向に進んでいくことになる。さて、このマシンの仕組みを知らない人がそれを見ると、マシンはまるでいつも光を「求めて」、光にたどり着くことを「目的」として動いているように見えるだろう。そのように記述すれば、志向的言語で記述したことになる。「光が恋しくて…」などといった風に比喩を暴走させない限りは、目くじらをたてるほどの問題はないように見える。しかしもちろんこのマシンには目的意識など欠片もないのである。

このように志向的な比喩とは、単純な機械的因果関係の連鎖の<結果として>生じたことを、あたかもそれを目的としていたかのように語る比喩である。この二つは、本来まったく別の事柄である。理論的な文脈で両者を混同することは、単なる誤謬そのものである。私が部屋の扉の在室表示を表示し忘れることは、結果として、学生に私が不在であると勘違いさせることになるが、このことは私が学生にそうした勘違いを起こさせることを目的としていた、つまり学生をだまそうとしたことを意味しない。私の木曜1限の講義が結果的に受講生を眠らせ、彼らの睡眠不足の解消に役立っているとしても、私の講義の目的がそれだと言われると、ちょっと悲しい。たとえ私の語りが備えている形質（抑揚のなさ、くどさ、学生の興味を掻き立てない話題を、理解困難な仕方の説明することなど）がすべて、あたかも学生を眠らせるためであるかのように見えようとも。（念のために言っておくが、これはあくまでもフィクションである。だいたい私は木曜の1限に講義などしていない。火曜の1限にならやっているが…）

ある行動が結果的になんらかの効果Aをもつということは、その行動がAを目的としているということと等価ではない。両者を区別することがこの上もなく重要であるときに、志向的な比喩は、その区別をなし崩し的に消滅させてしまう。しかし進化という理論的文脈とは、とりわけこの区別が重要な領域だったのでなかったろうか。ダーウィンの自然淘汰による進化のロジックの最大の眼目は、先の見通しも目的もない、無精神的なアルゴリズムがいかに複雑なシステムを生み出すかを説明できるという点にあったのではなかっただろうか。結果的にある出来事をもたらす盲目的な因果的プロセスが存在することを示すべきときに、その出来事を目的としてすべてが進行していたかのように語ってしまうのは元も子もない。

自然淘汰とは、遺伝子プール内で遺伝子の増加に差があるということである。その差は遺伝子の表現型効果（つまり遺伝子が世界に対して及ぼす影響の収支決算）の結果である。進化を説明するとは、遺伝子の表現型効果が増加率の差にいたる一連の因果関係の連鎖を解きほぐしていくことである。このプロセス自体の中に目的という概念を必要とする部分は

ない。志向性の比喩で語ることは、進化論において苦勞して追放した目的性を裏口から再び説明の中に招き入れてしまうことになりかねない。それは進化について論じるコンテキストで用いるにはあまりにも危険な比喩なのである。

ドーキンズのような生物学者たちにとって、このことは百も承知で、心配には及ばないのかも知れない。しかし志向性の比喩に耽ることの真の問題は、彼らが昆虫や鳥や魚についてではなく、ヒトについて語り始めた瞬間にもっとも深刻な形で露呈する。

IV 志向的システムの進化

志向的な語りで字義通りに記述できるシステムにどのようなものがあるのだろうか。唯一確実にそうであることがわかっているのは我々ヒトである。そもそもこの語り口は、我々が自分たちの行動を記述するためのものだったのだから。しかしなぜ、どのようにしてヒトは志向性をもつようになっているのだろうか。従来の多くの人間科学では、志向性つまり、意識というものを備えていることは人間であれば当然の自明の与件、説明を要さぬ前提、人間が人間であることの定義のような位置をしめていた。したがってこのなぜ、いかにという問いはめったに問われることはなかった。しかし進化主義の生物学者なら、この属性がいきなり神によって授与されたのでない限り、この問いは進化によって答えられるべき問いであることに同意してくれるだろう。デネットの走光性マシン、あたかも合目的性をもって行動しているかのように見える機械のように、進化はさまざまな「生存機械」を自然淘汰という盲目的のアルゴリズムによってチューンしながら、志向性の比喩で実にうまく語れてしまうほど、あたかも「目的」によって動機付けられているかのように振舞うものに作り上げてきた。しかし、その「生存機械」の作動から結果的に首尾よくある状態が達成されるということと、その状態を目的として「生存機械」が作動しているということとは、前節で述べたように別物なのだ。もしヒトが目的によって作動する「生存機械」という特異な存在であるとするなら、進化の過程でいつどのようにそうした変化が起こってきたのかと問うことは正当である。志向性そのものの進化について主題化する必要があるのだ。

残念ながら生物学者たちは、おそらく先に述べた二つの安全弁に自信があるのか、本当に志向的なシステムかどうか不明な、昆虫や魚や鳥、さらにはアメーバや遺伝子にまで気前良く志向的な語り口を適用してしまった結果として、人間を特徴付けている真に志向性をもったシステムがどのような進化の産物であるのかという問いを、問えなくなっているかのようだ。

ドーキンズが『利己的な遺伝子』のなかでこの問いに接近している唯一の箇所は、読者を失望させるものである。彼は言う。「内省経験を証拠として、われわれは誰でも、少なくとも現代の生存機械の一つにおいては、合目的性が『意識』と呼ばれる特性に進化したことを知っている。私はこれが何を意味するかを議論できるほど哲学者ではないが、幸いにして、

目的によって動機付けられているかのように>ふるまう生存機械のことを語るのはやさしいし、それらが実際に意識を持っているかどうかという問いを未決にしておくので、われわれの当面の目的にとってはこのことは問題にはならない。」[Dawkins 1989:50] まるで真の志向的システムの進化の問題を、ドーキンズがどちらかという嫌っている「哲学者」という専門家たちに丸投げしてしまっているようではないか。志向的な比喩の大盤振る舞いが、志向的な比喩で語れるシステムと、志向的システムそのものとの違いの進化的な意味を問うことを妨げているのだと考えざるをえない。

V 志向的語り口の破綻

1 ヒトへの適用：社会生物学の語り口

志向的語り口の害悪は、社会生物学の研究者の一部（ということにしておきたい）の人々が、ドーキンズらにとっては遺伝子中心の因果的説明の代用でしかなかった比喩としての志向的語り口を、ほかならぬ人間の行動を語る際に用いてしまうときにもっとも深刻である。マーティン・デイリーとマーゴ・ウィルソンが「人間の本性についての確固とした一般理論の枠組みの中で暴力を説明する」目的で「ダーウィンの自然淘汰による進化の理論」(Daly & Wilson 1988) を用いようとするとき、それ自体は大いに推奨されるべき方針であった⁹⁾。しかし彼らがそれをドーキンズの言うところの「遺伝子の用語による正確な表現」で行う代わりに、疑わしいその比喩的簡便語法によって行うとき、それは逆に多くのナンセンスを産出することになってしまうのである。

彼らは書く。「自然淘汰の観点から世界について考えると、その住人たちの『利害関(interests)』について直感には反する見方に行き着く。表立った目的をもっているように見える (conspicuously purposive) われわれの心理や生理の究極的目標は、長寿でも快楽でも自己実現でも健康でも富でも心の平安でもない。それは適応度なのである。」[Daly & Wilson 1988:10] おそらく鳥や昆虫について比喩的に語っているのではなく、人間のことを話題にしているのだろう。人間の行為の重要な部分には実際に表立った目的がある。つまり意識された目的をもった行為である。しかしここではそれは「見かけ」のものだと述べられる。それに対して適応度、つまり大雑把に言えば繁殖成功こそが「究極目標」だと言うのである。たしかに直感には反している。そして直感に反するものはときとして、実際に誤謬である可能性も高い。

彼らは、(1) 志向的なシステムである人間の行動に見られる意識された目的や動機と、(2) 適応度 (=繁殖成功) を、まるで深度の異なる二種類の目的であるかのように語っている。前者が表層の見かけであり、後者こそが真のあるいは究極の目的という構造である。しかし思い出していただきたい。そもそも後者は、実は遺伝子の言葉でつまり進化の無目的なアルゴリズムで説明できることを、あたかも「生存機械」が自らを設計した遺伝子を増や

すことを目的として計算高く行動しているかのように語った比喩的な語り、簡便語法であったものである。それを字義通りの表現ととらないこと、必要とあれば常に遺伝子の言葉に訳し戻せるようにしておくことが、そうした比喩を用いることを正当化する条件であった。それが、この社会生物学者たちの語りにおいては、もはや比喩ではなく、志向的システムである人間がもつ目的意識の背後にある究極の目的として語られてしまっている。すでに説明の構図からして歪んでしまっているのだ。

非志向的システムだと想定された（あるいは志向的システムであることを無条件に前提とできない）生物たちについては、彼らの行動を「あたかも目的をもったかのような行動」として比喩的に記述することは、条件つきではあるが問題はない。しかし、すでに目的意識をそなえている志向的システムである人間の、実際に目的に向けられた行動に対して、わざわざ別の「目的」を持ち出して、「あたかも目的をもったかのような行動」として記述しなおすことになんの意味があるのだろうか。

たとえば、「高血圧に良いらしい」という噂に基づいて、人々がグレープフルーツを摂取する頻度が以前に比べて高くなったとしよう。この摂取行動には目的がある。つまり皆、血圧を下げたいと思ってグレープフルーツの摂取量を増やしたのである。しかしこのことが結果として>人々のビタミンC摂取量を増やし、危機にさらされていた健康の回復に貢献し、生き延び更なる生殖活動に貢献したとすれば、この行動は<結果的に>人々の適応度の上昇をもたらしたといえるかもしれない。このとき、もし人々のグレープフルーツ摂取行動の「究極の」目的がビタミンC不足を補うことだったとか、繁殖成功だったと述べたとしたらどうだろう。単に誤りである。たとえグレープフルーツが高血圧に効果があるというのが実は輸入業者の流したデマであり、人々の意識された目的が誤りであると判明したとしても、だからといって、人々のグレープフルーツ摂取行動が「高血圧をさげること」を目的としたものではなく、その真の、あるいは究極の目的は実はビタミンC摂取だったということになったりするわけではない。

さらに付け加えておくと、<結果的に>適応度の上昇に貢献する行動であることは、かならずしもその行動がダーウィン進化の産物であることを意味しないという点にも注意しよう。それは、その行動がどの程度遺伝子によってプログラムされたものであるかによる。たとえグレープフルーツの摂取の増加が<結果的に>適応度を高めたとしても、特にグレープフルーツを他の果物よりも好ませる遺伝的なプログラムがあるというのでない限り、この事実は進化とはなんの関係もない話になる。適応度の上昇は、その個体が持っている遺伝子の遺伝子プール内での頻度の上昇を意味するが、どんな遺伝子が増えたとしても、それはグレープフルーツの摂取行動のさらなる増加にはつながらないからである。禁煙はおそらく適応度を上昇させてはいるはずであるが、近年の禁煙の広がりやダーウィン進化によるものと考えられる人はいないだろう。人をタバコ嫌いに仕向ける遺伝子などというものがあり、それが人に禁煙をさせる原因となっているというのなら、話は別だ。そうした遺伝子は、その遺伝子

を持つ人が禁煙をし、適応度をあげることによって、集団内で広がっていくだろう。しかし現在の禁煙の流行が、そうした遺伝子のせいだと大真面目に主張する人はいるまい。人間の行動を説明する上で、適応度は社会生物学者たちが考えているほど役に立つ概念ではないのである。

志向的システムとして、実際に目的意識をもち、目的に向けて行動する人間においては、おそらくそうでないだろう昆虫のような生物の場合と違って、ある形質や行動が結果的にもたらすことを、「目的」のような志向的な言葉をもちいた比喩で置き換えることは、字義通りの意味と比喩とが交じりあって単に混乱を引き起こすだけである。デイリー&ウィルソンの説明を特徴付けているのもまさにそれである¹⁰⁾。もし人間の行動が、同時にダーウィン進化のアルゴリズムの枠組みでも説明できることを示したいのなら、混乱をさけるために、その記述は徹底的に志向的な言葉抜きでなされるべきだったのだ。

2 志向的比喩の迷走：子殺しをめぐって

1) 比喩の逆流

「嬰兒殺し」の章は、多くの社会で想像以上に頻繁に起こっている親による嬰兒殺しという行動が、包括適応度のモデルによって「少ない資源を割り当てようとする論理的戦略家のせっぱつまった意思決定」[Daly & Wilson 1989:42]として説明できることを主張した章で、人類学者の「観念的」な説明に対する著者たちの批判が展開していることもあり、彼らの説明がいかに迷走しているかを示すのにはぴったりだろう。

上の引用に明らかなように、いきなり志向的な語り口全開であるが、もともとはそれがウミガラスやハムスターの行動の記述であったことを念頭においていただきたい。あくまでも比喩だということである。私はそろそろ比喩にはうんざりしかかっているもので、ここではそれを遺伝子の言葉で言い換えた表現を用いる。

人間以外の動物においては、親が子供に対してどのような世話行動をおこなうかはもっぱら遺伝的にプログラムされていると考えて差し支えない。すべての子供に同じように世話を配分するよりも、その子供の状態や、親子が置かれている状況の性質に応じて、包括適応度(≒繁殖成功率)をより高めるような仕方でも世話を配分できるように、その「生存機械」をプログラムすることに成功する遺伝子が、定義により(トートロジー的に)遺伝子プールの中で自らのコピーを増やすことになる。つまりその行動は広がり定着していく。アレグザンダーによると、世話行動によって包括適応度が左右される要因は、(1)子供と親との遺伝的共有度(本当の子供とそうじゃない個体を区別でき、本当の子供の方に世話を配分できるようにプログラムできた方がよい)(2)子供が、親から受けた世話を実際に繁殖成功に結びつけることができる度合い(生き延びて生殖まで行きそうにない個体と、生き延びて生殖に成功しそうな個体を区別して、後者に世話を配分するようにプログラムできた方がよい)

(3)子供の世話と他の活動との競合(同じ資源を子供の世話に配分する代わりに、他の活

動に配分することによって結果的に包括適応度が高まる可能性を評価して、必要とあれば後者に配分するようにプログラムできた方がよい) の3つである。

この点で人間だけが例外だと考える理由はない。人間もまた同様にプログラムされてきたはずである。問題は、現実に観察され、知られている人間の世話行動について、そこにどの程度こうしたプログラムが寄与しているのかを判別するのは、おそらく非常に難しいだろうということだ。

たとえばデイリーとウィルソンが例に挙げる、ボリビアとパラグアイの国境付近に住むインディオであるアヨレオでは、初産の女性が「状況がもっと良くなってからもう一度出産しようという意図から」生まれた赤ん坊を埋めてしまうことがまれではないという。「このような思い切った決断をするおもな理由は、母親たち自身によれば、父親からのサポートが得られないということである。他の理由として母親たちがあげているのは、奇形、双子、または次の子があまりに早く生まれすぎ、母親の負担が過剰になって、上の子の生存が危険にさらされるときである。」[Daly & Wilson 1989:39] 言うまでもなく、これは上述のプログラムが働いていることの証拠にはまったくならない。女性たちは自分たちが置かれている状況について見極めて、熟考し、決断している。嬰兒殺しは、この意識された計算と理由付けで実行されている行為なので、そこに同時になんらかの生得的なプログラムが働いていたとしても、それがどれほどの役割を果たしていたのか判別することはできない。おそらくそんなものが仮になかったとしても、自分たちのおかれた状況に対する判断と思慮に基づいて同じような行為がとられたらというのを、女性たち自身の証言は示している。

著者たちが行う通文化的研究も、そうしたプログラムの活躍の証拠としては無力である。かけ離れた多くの社会で、嬰兒殺しが似たような理由で行われていることは、単に母親の直面する状況が似たようなものであり、似たような状況で人々が行う意識的な考慮がやはり似たようなものであるというだけのことかもしれない。

ここではいわば比喩の逆流とも呼ぶべき状況が生じている。志向的システムではない「生存機械」に生じている非・目的論的な因果的プロセスについて、〈あたかも〉その生存機械にしかじかの目的があり、計算づくで行動しているものとして語るという点でそれは比喩だった。しかしいまや実際になんらかの目的意識をもち、計算しつつ行動している存在に、同じ比喩を使おうとしているのだから、話は厄介になる。それは「人間はまるで狼だ」という比喩を、狼自身に対して使用（「狼はまるで狼だ」）しているようなものなのだ。

ぎりぎりの状況の中で出産し子育てせねばならない女性が、熟考の上おこなう嬰兒殺しが、結果的に包括適応度を高めているといったことが示せるかもしれない。著者たちは、嬰兒殺しが報告されている35の社会について、女性たちが嬰兒殺しにおいて考慮する理由を分類し、それぞれが上述の子供の世話において包括適応度を左右する三つの要因と一致していると主張する¹¹⁾。しかし包括適応度を高めること自体は彼女らの意識された目的ではないので、それが彼女らの熟考を導き嬰兒殺しに向かわせたと考えることはできない。彼女らの意識的

な考慮や計算自体が、遺伝的にプログラムされたものであり、結果的に包括適応度が高まることによって、彼女らにそのように考慮させるように仕向ける遺伝子が広まり、ますます彼女らがそのような計算をするようになるとも言えるならば話は別だが、それを証明するのは社会生物学者の仕事になる。それは、人生の具体的な諸問題に対して、我々がどのように考えて答えをだすかまで、遺伝的にプログラムされていると主張することに等しいので、見通しは暗そうである。

2) 嬰兒殺しの理由

著者たちが分類した嬰兒殺しの理由についても、細かく見てみれば、包括適応度を左右する三つの要因との一致は見かけ上のものに過ぎないことがわかる。

第一の論点「赤ん坊は本当に自分の子か？」であげられているケースは、嬰兒殺しの理由のうち「不倫での妊娠、別の部族の子、前夫との間の子」にあたる [Daly & Wilson 1989:48]。しかし不倫であれ、父親が別の部族であれ、前夫であれ、当の母親にとってはいずれも「本当に自分の子」であることに違いはない。女性にとっては相手が誰であれ、自分の子供を生み育てることは彼女の適応度を上昇させるので、嬰兒殺しは彼女にとってはむしろ適応度を下げる行動であることになる。

第三の論点は「現在の生育環境が子育てにとって適切か」であるが、経済的困窮や早すぎる出産、母親が他の親族のサポートを得られないような状況が、嬰兒殺しの理由となっている。報告されている多くの社会では、子供を産んでもそれを育てることが現実問題として不可能な状況が実際に頻繁にあるわけで、そこでそうした理由から嬰兒殺しが行われることに、わざわざ遺伝子の影響を持ち出す必要があるとは思われない。志向的なシステムである人間であれば、そうした状況についての理解から意識的な考慮や見通しによって、そうする以外にないという結論に達することになんの問題もないからである。著者たちが第一の論点に誤ってリストした上述のケースも、不倫の子などが夫や親族に拒まれ、サポートを得られないからであるとすれば、子育て困難な状況という第三のものに含めた方がよいだろう。

私が調査しているケニアのドゥルマでは、男にとって多くの子孫をもつことが最大の目標になっていたのだが、そのためにはその子が、本当に自分の子供であるかどうか問題にならない場合すらある。多妻婚が理想なのだが、資力の関係で誰にでもできることではない。というわけで老齢になってからやっと第二、第三夫人をもつケースも多く、その場合、夫自身の性的能力がすでに不十分だったりすることは珍しくない。かくして、年老いた夫は、彼の若い妻たちが婚外の恋人をもつことをしばしば容認することになる。自分の法的な子孫が増えることの方が重要なのである。また結婚に失敗した女性が、資力をもてば、自ら「夫」として女性と結婚するという「女性婚」という制度があり、少ないとはいえとくに稀だとはいえない¹²⁾。「夫」は彼女の「妻」に公認の恋人を持たせ、その恋人との間にできた子供は「夫」である女性の法的な子供になる。彼女は子供たちにとっての「父」となり、それが彼女に、

今後大きく発展していくだろう親族集団分枝の始祖として系譜的記憶にとどめられる希望を与えるのである。ドゥルマでは夫以外の男性の子供であることが嬰兒殺しの理由とされることは今のところない。

3) 意味の問題

しかしおそらく著者たちの議論の欠陥が最も問題となるのは、第二の論点「赤ん坊の質はどれほどか？親の世話を最終的な適応度に変換する能力はどれほどか？」であろう。生き延びて生殖する可能性の低い子供よりは、その可能性の高い子供に、限りある世話を配分するよう生存機械をプログラムしている遺伝子の方が、そうでないものよりも遺伝子プール中で広がるだろうことは確かである。35の社会における嬰兒殺しの理由の中で、この第二の論点に入れられているのは、「奇形児または重病の子」で、35の社会のうち21で報告されているという。著者たちはこの理由での嬰兒殺しが適応度上昇につながるのはあまりにも自明だと判断したのだろう。ここでの議論のほとんどを文化人類学批判に割いている。嬰兒殺しのうちでその理由が「奇形児または重病の子」として分類されているものを人類学者が報告するとき、それがしばしばある種の超自然的な観念—そうした子供が悪魔の働きによって生まれてきたのだ、といった類の—と結びついており、また人々はそれを理由として嬰兒殺しを行っているという解釈をともなっていることが、著者たちには気に食わないらしい。著者たちは「多くの人類学者が、彼らの学問にとっての正当な主題は、どちらかという人々が彼らの行動に付与している『意味』であり、それらの行動の原因やそれらの行動自体の特性の方ではないと、感じていることは明らかである」[Daly & Wilson 1989:50]と述べて、人類学者たちの「観念論」(ibid.)を激しく批判する。この批判には不正確なところがある。人類学者たちは、人々が行動に付与する意味が、原因よりも重要だといっているわけではない。それ(人々が行動に付与する意味)が、行動の重要な原因であり、こうした意味に動機付けられているという点が人間行動の重要な特性だと言っているのだ。しかし著者たちのこの迂闊な提示の仕方は、人々が行動に付与している「意味」が実際に行動の原因になりうるのだという可能性に、著者たちが思い至っていないことを図らずも露呈させている。彼らは「行動の意味と、はっきりと表明された理由付けもたしかに興味深いデータではあるが、それだけが興味深いデータなわけではない」[ibid.]と述べ、「実際に人々がどのような行動を行い」、「なぜそれをおこなうのか」が重要な問題で、「人々自身がそれをどう解釈し、どう説明しているかは別問題である」[ibid.]と、それを軽視してみせる。彼らにとって人々の行動の真の原因は進化であり、人々がおこなう行動は、包括適応度を上昇させるべく進化してきた結果なのである。

志向性をもたない生存機械について語る際には、それをあたかも目的をもった志向的なシステムであるかのように語る比喩を用いて語っておきながら、いざ、比喩ではない文字通りの目的や動機をもった志向的なシステムを前にすると、今度はその本物の目的の方を軽視

しようとするというのは、どこかおかしい。単なる比喩的な意味でのみ目的であり動機であったものが、今度は人々が意識している目的や動機よりもほんものの、真の目的や原因だとされる。これを倒錯と言わずに、何が倒錯だろう。

著者たちにとっては残念なことに、「奇形児または重病の子」として分類されている例のかなりの部分において、そうした子供たちが殺されることが包括適応度の上昇につながるという主張は必ずしもあてはまらない。「健康な赤ん坊を『迷信的に』殺してしまうような社会はほとんどない」(ibid.)と著者たちは断言するが、これはあきらかに事実と反している。ちゃんと民族誌を読まずに HRAF などで作業しようとするからこういうことになるのだ。嬰兒殺しの「奇形や異常」として分類されている事例を、具体的な民族誌で詳しく見てみれば、その奇形や異常に「逆子」や「上歯が先に生えてくること」「出産時点で髪の毛が生えそろっていること」などが含まれていることに気がつくはずなのである。

ドゥルマでも ヴョーニ (vyoni) として殺害の対象になる子供は、逆子(脚から出産した子供)、上の歯が先に生えてきた乳幼児などを含んでいる。通常のあり方の転倒であるという事実が、秩序に対する脅威として捉えられているのだ。ヴョーニを殺害するのはそれを産んだ女性ではなく、彼女の母親、つまり子供の母方の祖母である。ムアチェ川のモンバサ街道近くの屈曲点に深い淵となっている場所があり、そこはマヴョーニという名前で見られている。こうした子供はその淵の石の上に放置された。赤ん坊を負おう布を鞭のように使い、子供を鞭打って「ヴョーニよ、もしお前が本当にビョーニなら、元いた場所に帰れ」と言って、翌朝まで放置する。ビョーニであれば、翌朝まで待つこともなく、即座にそこに棲む霊たちによって彼らの世界へ連れていかれてしまうという(おそらく淵に落下して死亡するのだろう)。ムアチェ川から遠方の地域では、子供はどの小屋にもある水がめの中に沈められた。あるいはバオバブの木の根元の洞に、鞭うたれたうえで放置された。水辺や洞窟、バオバブの根元の洞などは異界との接点であると考えられていた。つまりヴョーニとは本来異界に属すべき存在が間違っ て屋敷に生まれてきてしまったものであり、そのまま成長するとさまざまな災いをもたらすという理由で殺されねばならなかったのである。

単なる伝承の類ではない。私が親しくしていた(ほぼ私と同年輩の)男は、上の歯が先に生えてきたマジェゴ (majego) と呼ばれる種類のヴョーニであった。そこで彼の祖母が彼を殺さねばならなかった。最初彼の祖母はモンバサのイスラムの導師(ドゥルマの多くの人々はイスラムの導師は妖術を使えると信じている)を訪れ、イスラムの邪術によって子供を殺してくれるよう依頼したが、(当然のことながら)断られた。そこで、今度はムアチェ川に行き、彼を淵に放置した。しかし翌朝再び訪れたところ無事であったので、彼はそのまま育てられることになったのだという。彼は運が良かった。

ヴョーニのカテゴリーには、ドゥルマの人々の目から見るとすべての「異常」な赤ん坊が含まれるので、そのまま順調に育て子供を産むまでには至りそうにない赤ん坊もそこには入っていただろう。しかしそれらと一緒に、逆子だったり、上の歯の方が先に生えてきたりし

ただけでまったくの健康体である子供も殺害していたのなら、この理由で行われている嬰兒殺しが包括適応度の上昇につながると無邪気に想定することはもはやできない。

ドゥルマはけっして特殊な事例ではない。アフリカの民族誌を読めば、いたるところで同様な慣行に出くわすことになる。「逆子」や「上の歯が先に生えてきた子」がそう珍しくないことを考えると、ここでいう「奇形」にはかなりの数の健康な子供が含まれていたのだと考えざるをえない。

ドゥルマではこの習慣は私が調査を開始した 1980 年代にはほとんどなくなったと言われていた。ひそかに行われていたのかも知れないが、真実は知る由もない。むしろヴォーニが殺されることなく、そのまま育てられていることを嘆く意見をしばしば耳にしたことに注目したい。1990 年代には人々は作物の不作や雨が降らないことをヴォーニが殺されずに育てられているせいにしていた。殺すようにとの周囲からの圧力がなければ、誰も自分が産んだ赤ん坊を殺したくはないので、ヴォーニがそのまま育ってしまうのだと。ヴォーニ殺害の義務がその赤ん坊の母方の祖母が負うべき義務であった理由も、人々によると赤ん坊の母親には自分が産んだ子供を殺すことはできない、彼女は殺したがらないからだというものだった。さらに母方の祖母なら同じ母系クラン (ukuche) なので、母系クラン内部の殺人ということになり、殺人賠償 (kore) の問題が生じないというのも重要な理由だった。

こうした詳細を述べたのは、実際には「異常児」の殺害をめぐるのは、それを産んだ母親自身の動機—進化によって形成された傾向性であれ、状況理解に基づく意識的な(熟慮)計算の結果であれ—よりも、地域共同体の成員たちの思惑が大きな役割を果たしていたのだという事実を示すためである。嬰兒殺しへと人をさしむけていたのは、ヴォーニを取り巻く宇宙論的な意味の体系—そのなかで逆子など通常の秩序の転倒と見られる存在は、秩序を脅かす不吉な存在として意味づけられることになる—と、共同体の未来への憂慮、さらに誰がさまざまな付随する問題を引き起こすことなくその仕事をやってのけることができるかについての考慮などの入り組んだロジックであったことがわかる。生まれてきた子供に対する世話の配分を決定する遺伝子による生存機械に対するプログラムがヒトにそなわっていたとしても、生まれてきた子がヴォーニであるかどうか、それを殺すべきかどうかの決定(それはしばしば子供の両親以外によってなされる)に、そうしたプログラムがどの程度寄与しているのかは、容易には判断できないし、その程度が二人の著者が考えているほど圧倒的であるとも思われない。

VI 志向性、比喩、進化

私は社会生物学や進化心理学のあら捜しをして全否定するために議論してきたわけではない。むしろ通文化的に共通して見られる人間行動の特性に、ダーウィン適応の産物としての遺伝子レベルで組み込まれたプログラムがどの程度寄与しているのかを明らかにするこ

とがきわめて重要であると確信しているし、それが明らかになることをおおいに期待している。それは人間行動を説明する重要なツールになるだろう。しかしその一方で、上述のデイリーとウィルソンの研究に見られるように、そうした研究のあるものが、人間が志向的システムであること、意味と目的によって自分の行動を制御する存在であることに対する過小評価の上に進められていることに失望していることもたしかである。それは進化学の立場から見ても首尾一貫しない姿勢である。人間は進化によって志向的システムをそなえた存在になったのであり、突然の神からの賜物で、あるいは他の動物との奇跡のような断絶によってそうした存在になったわけではない。むしろ明らかにすべき最大の課題は、志向的システムの進化、意識と意味の進化の過程を解明するという課題であるはずだ。社会生物学はなぜそれに取り組もうとしていないのだろうか。そちらの方がよほど不思議なのだ¹³⁾。

私はその原因の一つが、志向的な言葉による比喩で説明する語り口なのではないかと思っている。本来は自然淘汰の盲目的アルゴリズムという遺伝子の用語で正確に語ることができるが、比喩的に語った簡便語法であったもの—非・志向的な「生存機械」に対して用いられる限りではそれほど深刻な問題にはならなかった—が、それ自体志向的な存在である人間に適用されたときに、その比喩性が忘却されて混乱が生じているのである。人間行動をダーウィン進化の視点から見ようとするならば、比喩的な簡便語法を捨てて、遺伝子の用語による本来の正しい語り口に徹すべきだったのだ。

適応論的なアプローチ—それ自体は「発見論的」価値がある有効な手法であるが—に含まれるやや「目的論的」な構えと、この比喩がもちこむ歪みのせいで、社会生物学は人間の文化や社会制度について発言するときに、しばしば、おそらくうっかりと、ダーウィン進化の厳密な論理からはずれた議論をしてしまう場合すらある。

たとえば次の発言は、社会生物学やそれと親和性の高い生態学的人類学では普通に見られる考え方を示している。「社会生物学者は文化的な差異が見出されたら、文化がその生態環境での生物の適応度を上げるのにどのように役立っているかを検討し、特定の文化の由来に関しても生態学的な機能による説明ができないかどうか思いをめぐらす」[坂口 2009:79] 一見、進化論的な視点であるように見えるかもしれないが、そうではない。ここで述べられていることを、遺伝子の言葉による自然淘汰のアルゴリズムで述べなおすことができないからである。文化的差異ということで、ここでは集団ごとの行動様式や風習の違いを例にとって考えてみよう。ある集団で特徴的な行動様式や風習が、その集団がおかれた環境（生態学的環境に限る必要はないが）のなかで、実際にそうした行動様式に従っている人々の適応度を、それに従わず他の仕方で振舞ったとした場合よりも、上昇させることが判明したとしよう。適応度の上昇とは繁殖成功にほかならず、より多くの子孫をもつことを意味する。しかしそのことが、その行動様式や風習の広がりや再生産にどのように関係しているというのだろうか。もしその行動様式や風習が、鳥の給餌行動のように遺伝的プログラムによるものであったとすれば、たしかに繁殖成功は、その行動の広がりにも寄与する。しかしその場合、それは文化

的差異ではないことになる。遺伝的プログラムによるものでないとすれば、繁殖成功により増加した遺伝子がなんであれ、それはこの風習の広まりにはなんの役にもたない。子供は親の行動様式を引き継ぐのだ(ただし非遺伝的に)と考えれば、子供の数の増加を特定の行動様式の広まりに結びつけることは可能である。実際ある種のミーム論ではそうした議論がなされている[Lynch 1996]。しかし上の議論の行き着く先が、文化伝達に関する最も素朴でつまらないこうしたモデルであるとするなら、かなり拍子抜けである。ひとことで言えば「新しい考え方や行動様式を広めたければ、子供をたくさん作れ」ということなのだから。おそらく上記の引用で坂口が考えているのはこれではなからう。しかし、これが適応度の上昇を文化的差異の形成に結びつける唯一の経路なのである。

揚げ足取りだと考えないでいただきたい。これは厳密な遺伝子の言葉のかわりに、簡便な比喩を使うことがもたらす問題点なのである。人間は、志向的システムとして進化してきた。その進化を解明し、人間の行動様式における遺伝的なプログラムの寄与を解明しようとする際には、志向的な言葉を比喩的に用いる簡便語法とはきっぱり縁を切ったほうがよい、ということをおしは言いたいのである。

文化的差異をダーウィンのアルゴリズムで説明するには、遺伝子にこだわることはもはやベストではない。そのためには、特定の行動様式や風習がどのような『表現型効果』つまり世界に対してそれが及ぼす影響の収支決算—をもち、それが結果的にその行動様式や風習をいかにその集団内でさらに広げていくかを明らかにする必要があるのだが、そこではもはや繁殖成功はたいして大きな役割を演じていないように見える。利己的な遺伝子のロジックに匹敵する、トートロジー的で再帰的なプロセスに当たるものが、文化的差異の領域ではいったい何であるのかは、おそらくダーウィン進化論的なものの見方が社会学者に突きつける最大のチャレンジであろう。

ダーウィン進化の視点、自然淘汰という盲目のアルゴリズムによって複雑な世界の生成を説明するという視点は、今後もさらに大きな影響を人間諸科学に及ぼしていくことだろう。そのとき、人間を特徴付ける志向性は、まさに進化の視点によって説明されるべき最大の問題の一つとなる。社会生物学のある種の論者が行っているように、人間の志向性を、進化論的な説明に敵対する何かとして退けたり過小評価したりすることは、逆にそれが進化の産物であり、進化の視点によって説明すべき問題であることを覆い隠してしまう。それに責任があるのが、進化主義の議論の中に浸透した、自然淘汰の盲目のアルゴリズムを逆に志向的なシステムの合目的な計算であるかのように語る比喩的語り口だった。それを、それ自体が志向的なシステムであるところの人間に関する説明に無反省に持ち込んだ結果が、ここまでで検討してきたさまざまな問題である。それらはおそらくこの比喩に頼らず、ドーキンズが強調していたように、遺伝子の言葉による正しい説明に忠実でありさえすれば、回避できたはずの誤謬なのである¹⁴⁾。

注

- 1) 文化人類学は、他の人間諸科学が暗黙のうちに前提にしている人間観が、西洋近代社会での特殊な、限定された経験をもとに作られたものであることを、非西洋社会の研究を通じて明らかにし、特殊西洋的な人間モデルに変更を求めてきた。しかしそうした議論そのものも、それ自体が人間についてのいくつかの暗黙の前提を含んでいた。
- 2) 志向性 (intentionality) は布伦ターノによって意識や心的現象一般の特徴とされたもので、意識あるいは心的状態はつねにその対象を内在的にもつという特徴を指す。ラテン語の in-tentio (内に留め置く) に由来する。我々が意識を持っている、心を持っているというのは、具体的には要するに何かに気づいている、何かを知覚している、何かを信じているなどなどのことに他ならない。意識とはつねに「何かについての」あるいは「何かに対して向かう」という心の状態なのである [Searle 1983]。志向性があるということは、状況に対する理解や欲求や信念や動機といった心的状態をもっているということであり、こうした欲求や信念や動機に基づいて行動するのが、志向的行為者、あるいは志向的システムである。デネットは、ある対象の振る舞いが、その対象を信念や欲求、その他の心的状態をもつつまり志向性を示す—行為者として扱うことによって予測できる場合、それを志向的システムと呼んでおり、本論考で引いている本当に志向的なシステムと比喩的にのみ志向的なシステムを明確に区別することを拒んでいる [Dennette 1989:15]。
- 3) 参照は、互惠性の進化をめぐるアクセルロッドの「繰り返し囚人のジレンマ」ゲームのシミュレーション研究の紹介している第 12 章と、1982 年に出版されたドーキンズの『延長された表現型』で展開された見解を要約的に紹介した第 13 章が付け加わった 1989 年出版の『利己的な遺伝子』第二版を用いた。以下では特に断りのない限り、ページの参照は英語版で行う。和訳は日本語訳を参考にしたが、それらが不適切と判断した場合には改訳している。したがって訳文の文責は筆者にある。これは他の文献についても同様。
- 4) 私はけっして比喩的語り口全般について問題視するつもりはない。遺伝子によってプログラムされた「生存機械」という比喩は、その生存機械のもつ「目的」や「戦略」について語り始めたりしない限り、卓抜した比喩であるし、染色体を人間の体を作るための 46 巻のルーズリーフ・バインダー版の設計図に見立てた比喩 [Dawkins 1989:27] や、染色体上で同居する遺伝子をボートのクルーにたとえ、そこでいかに個々の遺伝子に対して淘汰が働くかについて説明した比喩 [op.cit.:38-39,85-86] も見事である。私が問題視する比喩は、意識、目的、戦略、動機などの志向的な言葉を用いた比喩のみである。
- 5) ドーキンズは「表現型効果」を遺伝子が生物個体の身体に及ぼす効果に限定せず、それを介して、環境や、そこにいる他の同種の個体や異種の個体との相互作用の結果として出現する「それが世界に及ぼすあらゆる効果」として考えている [Dawkins 1989:238]。包括適応度は、いわばこの広義の表現型効果の関数である。
- 6) 個体つまり「生存機械」は生き延び自ら子孫を残すことによって、結果的に、自分をそのように構成し作動させる遺伝子を広めることができるが、それが遺伝子のより多くの複製が可能となる唯一の道ではない。その生存機械自身の生存と生殖よりも、同じ遺伝子を含んでいる可能性の高い別の個体 (キョウダイやコドモなど) の生存と生殖を助長するように作動した方が、結果的により効率的に遺伝子の広まりを可能にするような状況があれば、そうした利他的作動様式をそなえた個体をプログラムする遺伝子の方が広まっていくことになる。ハミルトンの血縁淘汰の考え方である。個体が自らどれくらい子孫を残せるかは、その個体の「適応度」と呼ばれるが、その個体だけでなくその個体の作動様式が、遺伝子を共有しうる他の個体を含めて全体の適応度をどのように規定しているか問題にする必要があるのである。それらが「包括適応度」の概念であり、生存機械の成り立ちと作動はこの「包括適応度」によって、つまり、自らの適応度だけでなく、その作動が他の同じ遺伝子を共有している可能性のある個体の適応度をどれだけ下げたり、助長したりするかを含めて評価されねばならないとされている。実際の計算は相当複雑になりそうだ。
- 7) ドーキンズは述べる。「『すぐれた』遺伝子が遺伝子プール内で生き残るものとして盲目的に選択される。これは理論ではない。観察された事実ですらない。それはトートロジーなのである。」(Dawkins 1989:86 一部改訳) 別の箇所でも、同じことをより比喩的な言い回しで次のように述べている。「遺伝

子プールの中で、対立遺伝子を尻目に自己の生存のチャンスを増大させるような仕方で振舞う遺伝子ならなんでも、その定義からして、トートロジー的に、生き残る傾向がある。」[Dawkins op.cit.:36] 進化論の中心にあるのがこのトートロジーである。

- 8) 『利己的な遺伝子』においてドーキンズ自身はアルゴリズムという表現を用いていない。この表現そのものは、おそらく哲学世界でのドーキンズの最大の擁護者であるダニエル・デネットのものである [Dennett 1995: chap.2]。デネットはダーウィンが自然淘汰の考え方によって見出したものは、今日用語でなら「アルゴリズムというものの力」なのだという。アルゴリズムとは、算数の筆算や言葉をアルファベット順に並べ替える手続きのように、「それが「作動」ないしは実地に運用されれば必ずある種の結果を生み出すことが期待される形式的手順のことであり」[Dennett op.cit.:50] それには三つの鍵となる特徴をそなえている。(1) 基質中立性：「この手続きの力は、この手続き自身の<論理的>構造によるのであって、この手続きの個々の運用に用いられる素材の因果的力によるのではない。」(2) 無精神性：手続きを構成する一つ一つのステップは「従順なうすのろがものごとを行ったり、簡単な機械装置がものごとをおこなったりするのと同程度に」まったく単純なものである。(3) 保証される結果：「ミスステップなしに実行されれば、アルゴリズムはいつも己の果たすところをみずから果たす。」進化のプロセスをアルゴリズムとしてとらえることが、「目的論を一気に目的を書いた秩序にまで還元してしまう」ことを可能にする。
- 9) デイリーとウィルソンの研究を取り上げるのは、単に社会生物学が人間の行動や制度について語る際の一般的な傾向の一例として以外の意味はない。とくに酷い例を選んで槍玉にあげようというつもりはない。彼らとその研究の中で人類学に対して異様な敵意と軽蔑を表明していることがその理由の一つでないというつもりもないが。
- 10) 進化心理学や淘汰思考を前面に押し出しているように見えるが、中身を注意深く読むと、実は説明の多くは人々が意識的に遂行しているようなさまざまな利害計算であったりする。ある種の社会における兄弟間殺人の大きな頻度について、彼らは次のように説明する。「伝統的な父系社会における男性間の争いは、しばしば強大または近い父系親族間で争われる。その理由の一部は、近接関係や相互交渉のパターンが親族の系譜にそって構造化されているからであり、また、親族が、限られた家族財産をめぐる必然的に競争せざるをえないからでもある。」[Daly & Wilson 1989:31-32] これはごく普通の社会学的、あるいは人類学的説明そのものである。しかし一方ヒトにおいても、包括適応度への寄与による対人関係評価に応じて他人を遇するような仕組みが進化しているはず(血縁淘汰)であるので、父系社会のこうした状況においてすら、「血縁関係は葛藤を和らげるように働くはず」[Daly & Wilson op.cit.:32] だと彼らは言う。しかし兄弟がライバルになりがちなこうした社会構造の中で、それを緩和するような傾向性を仮に抽出できたとしても、それがこうした遺伝子レベルでなされているプログラムの結果であるのか、親族イデオロギーやその他の規範の効果であるのかを見分けることなどほとんどできそうにない。後者にはなんの効果もないとでも主張するのでない限り。
- 11) 実際には4つのカテゴリーに分類されているが、第4は「その他」の項目であり、最初の3つが、子供の世話行動において包括適応度に影響を及ぼす3つの要因に対応している。
- 12) 1995年の時点で、私が調査のベースにしていた人口1000人に満たない近隣集団で、女性婚による世帯が二つあった。「夫」である女性の死後、残された妻は一つのケースでは「夫」の兄弟によって相続された。2006年にもう一つの世帯でも「夫」であった女性が死亡したが、彼女の妻は再度正式な婚資の支払いによって別の男性と結婚した。2010年の時点では、この近隣集団で「女性婚」の世帯は存在しない。おそらくこの制度は廃れつつある。
- 13) もちろんそうした試みはある。進化心理学ではニコラス・ハンフリーが正面切って意識の進化を主題化している [Humphrey 2003, 2009]、哲学者であるダニエル・デネットの一貫した取り組みは、進化の観点から人間の意識を解明せんとするものである [Dennett 1989, 1992, 1995, 1996, 2005]。ドーキンズのミーム論も早くから、志向的システムとしての人間行動の進化における非遺伝子的な複製子という概念で、文化の領域が解明できるという提案を行ってきた。
- 14) もちろん、志向的なシステムの説明を、志向的な言葉を用いずにやることは実際には簡単ではない。その困難は、人間の志向性の問題に正面からきわめて注意深く取り組んでいる研究においても完全

に拭い去られているわけではない。マイケル・トマセロは、志向性 (intentionality)、とりわけ他者を志向的な行為者 (intentional agent) として認識する能力の有無が、人間とその他の類人猿との違いであると言う [Tomasello 1999:53]。この「生物学的には非常に小さな違い」 [Tomasello op.cit.:54] が人間に特有の累積的「文化的継承 (cultural inheritance)」 [ibid.] を可能にした。つまりこれにより人間は、行動様式を、遺伝子による生物学的継承のみならず、文化的継承によって累積的に継承する「二重継承 (double inheritance)」によって進化させていくことが可能になったのだ、とトマセロは論じる。そして人間の個体発生つまり赤ん坊が成長していく過程において、この能力がどのように発現してくるのかについて、詳細な観察および実験データに基づいて解明し、言語習得などについてきわめて注目すべき議論を展開している。今後の人類学にとっても多大な影響をもつだろう研究である。

しかし彼の研究も、志向的なシステムが発達してくる過程を記述する際に、先取りの志向的な用語が使われてしまうことに起因する問題と無縁ではない。生後すぐや数ヶ月の乳児について、彼らが何かを「知っている」 [eg. Tomasello op.cit.:60] とか、「理解する」 [eg. Tomasello op.cit.:70] などといった、すでに志向性を完成させた人間の知的活動を記述する言葉が自由に用いられている。「知る」「理解する」といった言葉そのものの意味は定義されないままに。たとえば乳児が、とろうとすると姿勢が不安定になるような遠すぎる物体に手を伸ばすことを控えるといったことを理由に、乳児が自分の能力とその限界について「知っている」と述べられたりする箇所である。状況に合わせて運動調整が行われていることを根拠に「知る」という動詞を使うことができるなら、それは、空気中の酸素濃度が低下したときに呼吸が速くなることをもって、その個体が「空気中の酸素濃度の低下を知っている」と述べるのとどう違うのだろうか。

志向性の進化や発達について研究するためには、その過程を志向的な用語抜きに記述できねばならないというジレンマがある。そのための語法を確立する必要があるのである。

参考文献 (訳文を参照したものについてのみ邦訳をあげた)

Daly, M. & M. Wilson

1988 *Homicide*, New Brunswick and London: Aldine Transaction. (邦訳: 1999 『人が人を殺すとき—進化でその謎をとく—』長谷川真理子・長谷川寿一訳、新思索社)

Dawkins, R.

1989 *The Selfish Gene(2nd edition)*, Oxford University Press. (邦訳: 1991 『利己的な遺伝子』日高敏隆他訳、紀伊國屋書店)

Dawkins, R.

2008(1982) *The Extended Phenotype: The Gene as the Unit of Selection*, Oxford University Press. (邦訳 1987 『延長された表現型—自然淘汰の単位としての遺伝子—』日高敏隆他訳、紀伊國屋書店)

Dawkins, R.

2006(1986) *The Blind Watchmaker*, W.W.Norton & Company. (邦訳 2004 『盲目の時計職人—自然淘汰は偶然か?—』日高敏隆監修、早川書房)

Dennett, D.

1989 *The Intentional Stance*, A Bradford Book The MIT Press.

Dennett, D.

- 1992 *Consciousness Explained*, Back Bay Books.
- Dennett, D.
- 1995 *Darwin's Dangerous Idea: Evolution and the Meanings of Life*, Penguin. (邦訳 2001 『ダーウィンの危険な思想—生命の意味と進化—』山口泰司監訳、青土社)
- Dennett, D.
- 1996 *Kinds of Minds: Toward an Understanding of Consciousness*, Basic Books.
- Dennett, D.
- 2005 *Sweet Dreams: Philosophical Obstacles to a Science of Consciousness*, The MIT Press.
- Humphrey, N.
- 2003 *The Mind Made Flesh: Essays from the Frontiers of Psychology and Evolution*, Oxford University Press.
- Humphrey, N.
- 2003 *The Inner Eye: Social Intelligence in Evolution*, Oxford University Press.
- Humphrey, N.
- 2009 *Seeing Red: A Study in Consciousness*, Harvard University Press.
- Lakoff, G. & M. Johnson
- 1980 *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Lynch, A.
- 1996 *Thought Contagion: How Belief Spreads Through Society: The New Science Of Memes*, Basic Books.
- P・リクール
- 2006 『生きた隠喩』久米博訳、岩波書店。
- Pinker, S.
- 2003 *The Blank Slate: The Modern Denial of Human Nature*, Penguin Books. (邦訳 2004 『人間の本性を考える—心は「空白の石版」か—(上)(中)(下)』山下篤子訳、日本放送出版協会)
- 坂口菊恵
- 2009 『ナンパを科学する』、東京書籍。
- 佐藤信夫
- 1978 『レトリック感覚—ことばは新しい視点をひらく—』、講談社。
- 佐藤信夫
- 1981 『レトリック認識—ことばは新しい世界をつくる—』、講談社。
- Searle, J. R.

1983 *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge University Press.

Tomasello, M.

1999 *The Cultural Origins of Human Cognition*, Harvard University Press.